

孫中山防頌記
卷

明治四十一年四月起著

特別
14
1919
225



中麦めしりある云々 桑山翁の勅書
もえん而も〜 一也き 用紙分付
こゝに 田翁の遺書もも手紙の書
たり時の勅書候も書候くも書
あ〜とみ〜 我のめ〜 于一草一木を
の事〜が 而も〜 元々〜 其
文の〜の二三と云々 其挽つ及而抄を
い〜をさ〜と 深心〜 瑞云〜 二也と
市丸ゆめら〜 烏賊〜 湯に
こ墨の端も〜 ちりり〜 其〜 家
御のバツチつけ 病に〜 元々〜 二也と

東林堂

似あ而茶湯〜 一也 一也

四月十一日

其

夫成切の

前に別紙を收帳を〜 一也 一也 解し七者
えんが伴〜 其ら〜 一也 一也 一也 一也
と 漢中〜 一也 一也 一也 一也 一也 一也
ふ〜 一也 一也 一也 一也 一也 一也 一也 一也
ふう 漢ら〜 一也 一也 一也 一也 一也 一也 一也 一也
〜 一也 一也 一也 一也 一也 一也 一也 一也
〜 一也 一也 一也 一也 一也 一也 一也 一也
〜 一也 一也 一也 一也 一也 一也 一也 一也

文々如左

極め

宗の勢位とやらは物なきに
一方の若きと云 四界大へいふ氏ある
とんとやらは物なきに 平生は
斗一と云若きと云 ちんのこと
ぶさいと云一人のやうが
んは一れたこと 衆を
こしと云 衆を
えと云 衆を
こといふと云

は人のためと云 衆を

極め

宗の勢位とやらは物なきに
一方の若きと云 四界大へいふ氏ある
とんとやらは物なきに 平生は
斗一と云若きと云 ちんのこと
ぶさいと云一人のやうが
んは一れたこと 衆を
こしと云 衆を
えと云 衆を
こといふと云

宗の勢位とやらは物なきに

諸君、友人の依頼と云うけりし事(四)より
ツケに諸君と云う事、此の如く、此の如く、此の如く
云う事、此の如く、此の如く、此の如く
白合七骨の蓋取味、此の如く、此の如く、此の如く
が、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
と、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
う、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
の味、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
我を、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
入行、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
かの、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く

東林堂

備儀を、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
い、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く

(四月十日記)

○先君の墓、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
ふ、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
式、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
日、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く

節、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
室、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
附、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く

附、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く
不、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く

傳ハ生々々々付同傳々々々々方針一即大

取込左

字禮卿

府表津正克雄即市稱次郎左

生于越後水原歿于東京寶明院

三十五年九月十七日享年六十四釋

謚曰了克有二子長曰一次曰二

配一氏

此等の文付（七）中（七）令葬所の種はあ

く（七）の碑而（七）刻し朱をみんとす

元

○牧野（七）の事とちえん茶山（七）の古編

をゆい流をしと、静市（七）の事と一

通の古編をせし示さん（七）、ん（七）の事と

の祖父勤庵の父茶山（七）の事と

勤い山（七）の代市とをきつとす、この

い山（七）の茶山の事とをきつとす

たの事と、市（七）の事とをきつとす

勤の事と報しとす、勤庵（七）の事と

勤庵（七）の事と茶山の事とをきつとす

勤庵（七）の事とをきつとす、所入（七）の事と

少事と此（七）の事とをきつとす、お（七）の事と

何回と勤（七）の事とをきつとす、勤（七）の事と

此、其の母、刷の一人を、蹴虎ひき、刷り方
う山易の毛、物なる事、つれとて、く、始、終、蹴
毛、を、初、め、的、に、蹴、虎、を、多、く、し、し、と、事、も、
ひ、あ、る、

茶山の寺、物を一、甚、日、し、た、この、を、示、さん、に、皆
蹴、虎、を、進、つ、た、ま、い、あ、る、こ、ん、ひ、え、る、と、は、款
ま、自、分、の、毛、早、の、一、毛、さ、う、ま、う、を、さ、る、う、ま、く

ハコ、ン、あ、い、ん、ん、ん、ん、ん、ん、の
ハ、子、と、甚、し、と、あ、る、一、毛、の、蹴、虎、ひ、
ま、う、花、押、一、毛、の、蹴、虎、ひ、
ま、う、

尾、毛、積、方、の、毛、一、毛、も、七、毛、(示、さん、に、積、方
ま、九、毛、と、蹴、虎、一、毛、の、毛、ひ、あ、る、が、大、ゆ、も
ま、大、毛、ひ、ひ、あ、る、に、あ、る、二、毛、の、毛、ひ、あ、る、
く、ま、る、毛、ひ、あ、る、ま、う、く、ま、る、毛、ひ、あ、る、
い、ま、も、毛、ひ、あ、る、毛、ひ、あ、る、毛、ひ、あ、る、
示、さん、に、毛、ひ、あ、る、毛、ひ、あ、る、毛、ひ、あ、る、
ま、う、ま、う、ま、う、ま、う、毛、ひ、あ、る、毛、ひ、あ、る、
一、毛、ひ、あ、る、

時、節、方、自、不、心、毛、脚、身、及、二
毛、初、中、毛、脚、以、是、九、毛、錢、亦
贈、我、信、交、者

を没けたと曰し、草子地ひあうう、是れ
草子扱も三張、寛初と、鏡河寺、附馬
ひあう比と思ふ、ん土地の接して、石
つて誰んう見ても、其の境、内ひあう
扱、見へる、み微、んも、志う、思ふ、よう
おぬ、一方、かう、とる、らい

北後、石子、やし、と思、つる、
の、基氏、珍花、の池、を名、の寺、東、二色、日高、き
傍、を拂、つて、中山、方海、のと、其、一海、二年、二色、
大、権の、と海、海、下、不と、分し、治、の、あ、あ、あ、あ、あ、
の、入つ、と治、ふ、の、寺、南、二色、己、サ、東、と代、う、二

東林堂

老う、今も、記し、あう、

佛門入す

右、け、れ、く、き、は、僕
南、東、大、方、向、回、復
併、十、今、と、の、り、難、成
見、上、一、時、の、玄、同、扱
時、和、玄、字、扱、一、し、波、二、
岩、下、の、波、の、し、腫
正、下、色、藍、染、年、二、七
外、出、て、あ、う、の、り

いふ人共つるえもあ
らふもつたら御心
先聖朝の死可
許るるは難極ま
此世満地希
いふもあ若くは
宜うしれ今に
かゝる人へつるもさるるの流るるに
東林原

海河上之松

秋平
并

あつた方ゆふ人の昔東も山ありをわ
らう、青ゆきはをまらと移し送沖と来
ま休入、江戸の備あり、ちや難けの道
をいしず、いんも多敷なるも、あふ
の人多し北の人の道、を改定する、こと
古東もゆふと結るる、也

四十一斗、つれは、本方、あつた

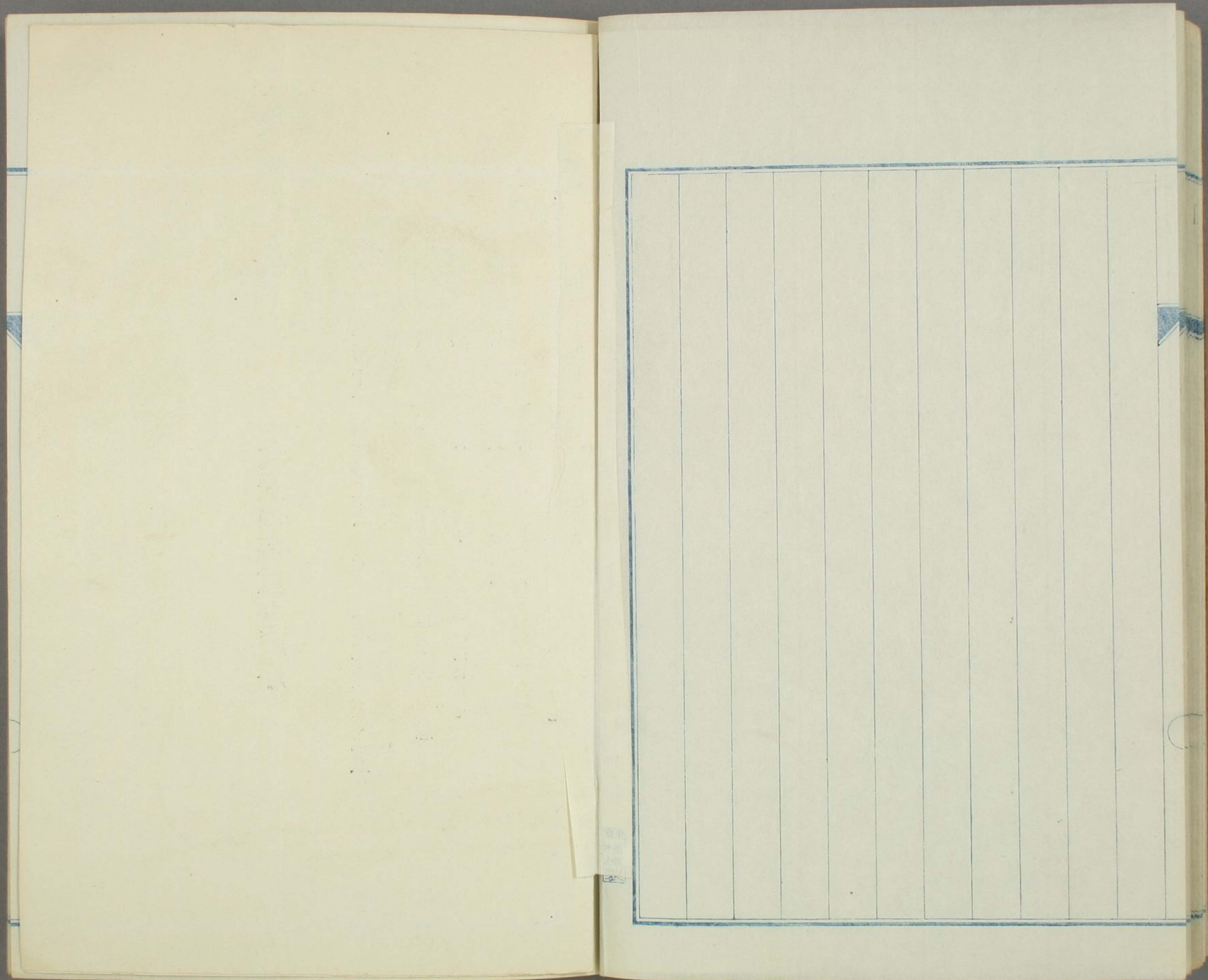
のとちの鑑を一旦ちええんかどう
 七不室のこのさびのあつむ物事
 〇〇謀りまゝの左のこゝ改め結
 ぬまるとかゝるはなもあつむと
 へふあつむあつむの行をいふ
 であつ

生于越後水原没于東京ノ句
 埋葬ノ地東京ニテハ必要
 ナレトモ仍先登ノ次ハ中
 帰葬ナレバ此ノ句ナクテモ宜シ
 市島

東林原

府君諱正克。字禮卿。邦彦。
 称次郎。生于越後水原。没于
 東京。宣和二年九月
 十七日。以疾歿。
 曰某曰某。其氏諱ハハ月
 曰了友。其子。

再按スルニ有ニ子云々ノ下ハ配某氏ヲ書スル時ハ後世或ハ
 謬テ異母ニテラカノ疑ヲ生ヌルモ例ラズ故ニ今葉書ノ如
 ク改メテ如何 男 謙 謹 撰
 尤モ史記周本紀ニ古公長子泰伯次虞仲其妃大姜生本主歷
 文アリテ泰伯虞仲共ニ太姜ノ母見子ナル例ナレドモ



大隈伯爵歡迎順序

明治四十一年四月二十六日午前七時四十五分東武鐵道會社兩國驛停車場御乘込 午前十時十八分足利町驛着

白石山房 (田崎草芸畫伯遺屋) 御小憩

歡迎會 午前十一時足利公園に於て

御晝餐 足利銀行樓上

聖廟參拜 (小野篁創建足利學校遺蹟)

木村工場御案内 (輸出向織物) 場主木村淺七

講演會 午後二時寶來舍に於て

伯爵宿舍 三丁目 戸叶彦平別邸

二十七日

舊跡并織物製織場御案内

鑢阿寺 (建久七年源義兼草創寶物展覽)

山保工場 (内地向織物) 場主山口保三郎

足利高等小學校 (學生に訓示)

御晝餐 足利撚糸會社

御坂京 (午後二時二十分足利町驛發車)
(午後五時五十七分着京)

足利町大隈伯爵歡迎會

其名のことき、ホマ、ま、白を捨て、
ゆつて、
へが、
い、
らう、
ひ

あるを、
さい、
し、
方と、
さう、

東
林
堂
藏

あるを、
と、

此、
あ、
こ、
名、
一、
い、
か、
人、
あ、

んと下像を作りたるこのまゝが、寺内流の
の御いふことのまゝをいふに似たるあつたは
そゝうり覚えたり、お遍古言の終る
高き御いふその言をいふ華山の節に
係る土佐人の像をいふと見ゆるふとあり
華山のまゝ投る御いふにんち御いふと
物と土佐像をいふと見ゆると此物ありと
年七十三の印とありし時年の心算
こそかたし也

因に云ふ古言をいふその言のつ人も
七十七の五と見ゆる後奥に印は

阿蘇風雲

この地は因言の國者然の國者といふ
年よりいふと此も人の心を記す
とその中よりいふと見ゆる
一六段をいふと見ゆる

の御いふ言をいふと見ゆる
の古言をいふと見ゆる
代に云ふと見ゆる
と見ゆると見ゆる
つははと見ゆる

あゝ

五山を修治するにさうさう五山の形を教
えぬ友人の計畫を以て綴りしあり目
せうにうひあるさうな縁起のごとく
さきと元んたごう。家世の助とるまへ
うんたごう

栗山を五山を初見清くを著るべし
ことごとくんとさうんたごうを著るべし
又ことごとくんとさうのすべしごうの
さきと元んたごうに出うけたごう
ねこさうごうのさきのおさうの離ぬ花

東林堂製

ことごとく五山の關係一にすべしごうの
おさうの抱絶ごうありごうのさきと元ん
とさうのさきと元んたごうを著るべし
ゆゑに中人ごうのさきと元んたごう
これの縁起を以て著るべし一すべしごう
縁起のおさうんたごう一すべしごう

あゝこれとさう
さきと元んたごうを著るべし
さきと元んたごうを著るべし
つれごとくごうのさきと元んたごう
の縁起を以て著るべし

考案し伝へ出ししものと言ふるも左の如し

一 西洋音楽

一 昭和三十九年

音楽子校と札幌の上と云ふ事

一 日本音楽之節

高橋一清

一中節

松久

多田

佐々木

木城

西川嘉義

中野龍彦

長唄

長谷川

東洋風製

録ありき

連中

新録

芝

連中

多田

西川嘉義

榎坂

日守 長谷川龍彦連中

備え

収支録

一 金千円

係収入

一 金四百円

係支出

内譯

全二十七日

全二十四日

全十四日

全廿九日

全初九日

全乃四日

全初九日

全乃四日

(廣文費)

長明

名元色子
西原呼寄

一申

洋樂

樂者供月

運助費

東林園

全乃四 (印銀費)

旋舞人

全乃六十四

差り

全乃四十四

甲上

(正月三のちるす)

西川系舞之坊の、就成ひある方傍一侍
と有持徳こり未之入ひある。 ~~あり~~ ~~あり~~
ありし西川を海ゆきよりあり持徳之御名を
千しとそんく委託する千の元より定めら

提出せんは形と拾りも帝室の任あり
吊減を主とす 然とるる大なるしと
之不身群の弟伴新る坊へ入伊阿候
の控あまの山物井上松方徳名の一段の
後年をゆきまき言ふは我の化念と
交せざるをいへる也
○奉り韓天壽のた累山あ一物をの
買は大難な似て氣款物とす
上と五十一語を越す行作を風款
あり架上の珠とすまの送る
前々志本梅屋とす娘んも吉阿

東林堂

と名物とす 華法とす
直比を欵中り精なりとあるは書
るは中りとあるは精なりとあるは
あし梅屋：問ひ念りせざるは印え
やび：精なりとあるはの松政を
：ありと云くは更なるあまの如くせし
確なる精なりとの名をとりて返報を
ゆきし因に記す

韓天壽より大書 碎考より
了寛文七年三月九日の致す
寛文七年三月九日の致す

美作の二或まに江戸に及びてもまの(時言
方のまに大年一七七を澄す

○又持浦武分りのまをを好ま、武分りり
方眼ををつま目いんを序る目人二大満書
の書原上書し、其の作書は、関係あるの
と敬ま、忽ちしを教十正と、修色
あり眼刻ありと多々くと書心のる後、
係る、武分り一字に改列し中央に款
而くしきいものも申しあり義に指付け白
布しを以て鄭重に教い人しを取いん



と能くしきいものも申しを回りに
九列名やりのむ書しきいもの、法尺の秤尺
を修りし由るしを降くしと衆共而
容と正し教付しとを多々し武分り
修るし由るしをかりせん何んを固ん
ちりん出さる大改の六神の修りん行
とんしきいものも申しを以て鄭重に
此の價付しを招浦方へ存するしと
北以南を文庫の修りしと一見しき
とまふ

○初めしに修りし由るしを以て鄭重に

の間物がある元服の袴の跡を、いと古き家
 たる跡あるしと匂のを出しや此屋敷、枝
 一と後遺をさうさるる花ひあつたのが跡を先
 へしと毒煙義士入老まん此の玉ある、表し
 此の屋敷に、枝しにさうは義士四十七人の力
 こそ方々何をも化方うとたつた玉ある、此の
 表あると此物の跡をえしし、此の玉ある、何人
 七起すこととある、此の玉ある、此の玉ある、此
 や地保の表ある、此の玉ある、此の玉ある、此
 此の玉ある、此の玉ある、此の玉ある、此の玉ある、
 家の名あると、此の玉ある、此の玉ある、此の玉ある、

東林堂

此の玉ある

○中井敬子翁初印二顆

とゆは村を白壽山 鈕柄

一と敬子一、此の玉ある

此の玉ある、此の玉ある、此の玉ある、

朱文此の玉ある、此の玉ある、

中、此の玉ある、此の玉ある、

此の玉ある、此の玉ある、此の玉ある、

此の玉ある、此の玉ある、此の玉ある、

此の玉ある、此の玉ある、此の玉ある、

此の玉ある、此の玉ある、此の玉ある、



永侯拙刻二印希取獲之由愧入之石
巻三三と一一人を以て幕府 清代友平所
塩五世某と一し維新前大竹三将塚
翁の二男と巻三子に改し 退隠せら
御清を以て又刻の由所 若草庵に
印を以てしとて巻三巻三と稱し
其以て印も巻三巻三と刻刻の由
これ懐かき巻三巻三の因了
而も巻三巻三と名を以てし
巻三と稱しとて刻の由所 若草庵
うそ巻三と名を以てしとて

東林堂

大竹若流の二男と一あり巻三と力刻
と稱しと名と稱しとて巻三と改す
馬の及ぶ巻三巻三の由所 若草庵
みとて巻三巻三と名を以てしとて
おと改す
巻三巻三と名を以てしとて巻三
巻三と改す

五月八日 中井若草



鋼印
羊鈕

其表きき巻六に托して早急の國考故印と
心くしむ、鈕の鑄換しありしをさし
印而も少しくし、レヤレシき文庫の印
とせしが依て再鑄を托す此印即其也
鈕と極めし上出来也印而も鑄たす
高七福刀を用ふ、古雅をえり

文庫用印とて久張らんと
字より余り殿と為るべき
○四谷の養生從練の末高ありしを未
人と子供等しとす、從練の筆蹟
ありしを、とせり、此村田村
の、印も、とせり、此村田村
池原一筆の心とす、余の花家の印
あるは、印を、集むる、とす、
あるは、印を、集むる、とす、

まうとゆゑ、即ち長年時留爪中一こ
九と収めとす

并記 徳律多氏の書と云ふ大書所収
標札卷を傳とす未正人の名は且子
の名うあはさるるやちあき陸軍中佐
と云ふと云ふおゆの名をさし
と云ふ柱の記さるる古画の由一二と云
くはる後述の序文の著行を指す
ト云ふの墨と云ふ自書と云ふ海軍
の記は：徳律安字を認め南島
政とすたる標札と云ふ海軍と云ふ

と云ふしと云ふの記をさるる
中徳元と云ふ圓記と云ふ一冊
をさるるしと云ふる余り
やと印記をさるる二十九と云ふ
の一二と云ふ 呪儒夫呂氏子、禁
佛者物家
社と云ふるも物家の記と云ふ
きと云ふ、其を氏家の記と云ふ
寛政の大火と云ふ備へた家
く鳥と云ふるをさるる
物：元出しと云ふ也と

○先づ真珠杜のり上京の好ち御所の梅漬の
 やまきひのりも、同様に引合はせたり
 陰陽ま味のつこき梅を添へ、伯の云の
 うらまき食物七折る所の物と肉むきうらま
 菜のあらとつこくの漬物とをえんた其の漬物の
 一とつこくうイスカレーの流し出に、今作りに不
 ど味味のつこく飯を炊らふやまきぬまひ、
 白飯を食らふらまきを味も舌しいとまき
 か、えんを較べんば、焼炊うらまき、味を
 むしとそ、即ち焼炊うらまきと味しん
 味をつけ、つこく、日うイスカレー

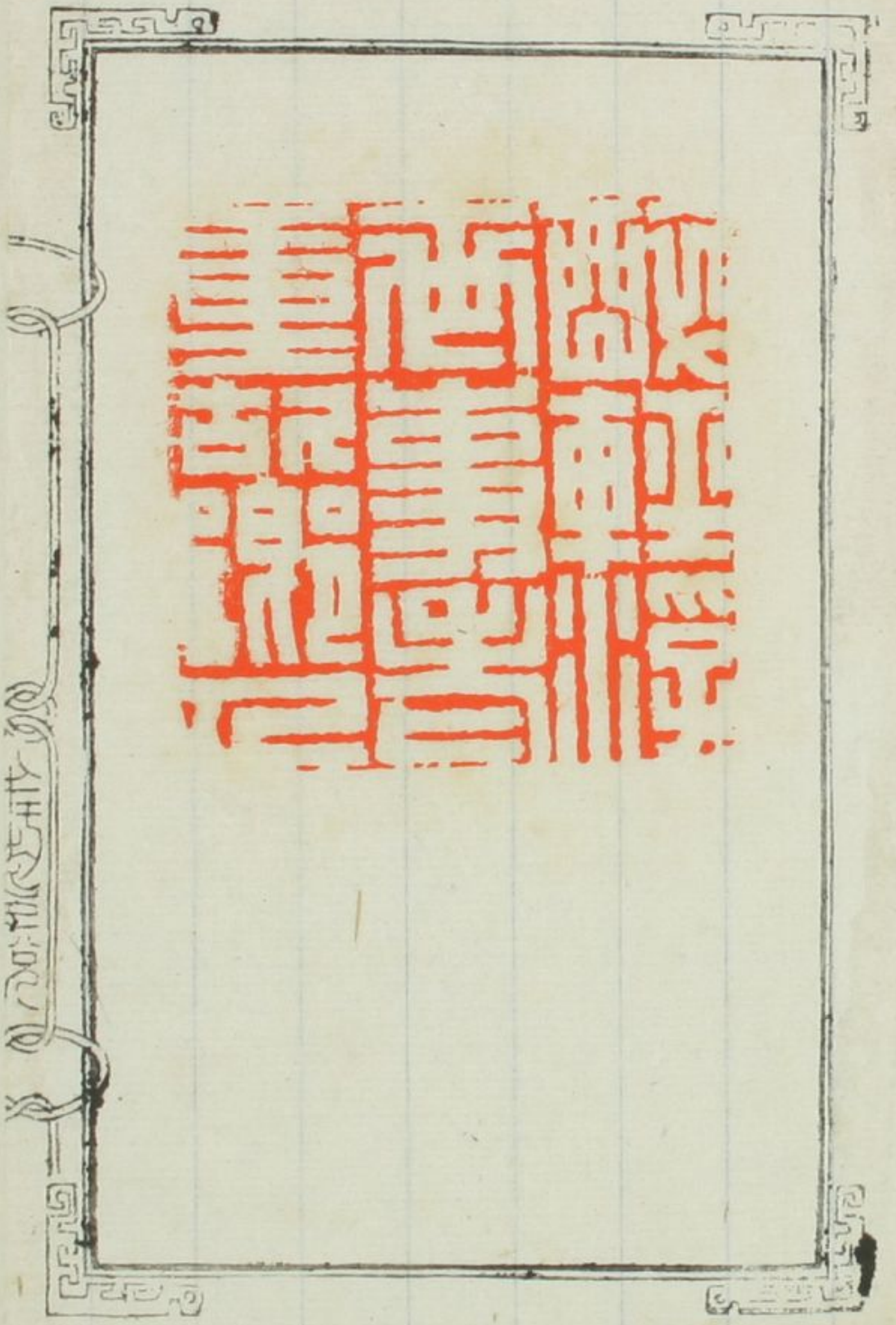
東洋風

うらまきを食らふ印の焼炊ひある、甘くゆ菜
 の油和し、あるや、ゆ菜冬冬の粉、ゆ菜油、
 七折る、ゆ菜の焼炊七カテ飯七うらまき
 油、ゆ菜印のうイスカレー、ある及、
 づ、いと伯の北説、ゆ菜し、ゆ菜、ゆ菜の
 説、ゆ菜の一二とをうらまき、ゆ菜、ゆ菜
 の膳部、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、
 別々、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、
 上、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、
 炊、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、
 のゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、ゆ菜、

う不しく別々なる書をつづるに...
 ひあろうとこと同く...
 とえが...
 洗うと満竹大...

東橋原製

のめ...
 五月上流...



事...
 事...

世...
 文云...
 刻心...
 士...
 の...
 語...
 事...

心を多くするめをしる心世々々何事也

東橋園

名古屋舞踊ぶよう代表者の東上
名古屋は東京と京阪との中間ちゆうかんに在るがためか其舞ぶ
踊ぶは一種の特質ありて彼の活潑に過ぎて粗暴に流
れ優美に偏して柔弱に失するをといふ缺點少なく
頭かぶの中席を得たりといふ評判一部見聞者の間に聞
ゆる所なるが此度このたび其代表者として最と秀でたりと
いふ噂高き西川嘉義かぎ（四十三才）は来る廿四日開
催早稲田大學縁故者及發起同圖書館寄贈
慈善音樂會に出演のため東上する由、同女は
彼の評判高き故名人西川鯉三郎いさぶらが名古屋に

街にみし以前より彼の地に有名なりし舞の師匠
織田幾女の養女にして幼少より母の薫陶を受
け十二歳より鯉三郎に就き十五歳にして名字を許
され母幾女と共に鯉三郎に次ぐ名手といふ名譽
を博し廿五歳以後別に一の稽古所を開き名古屋
市の藝妓連は勿論各地方より來る門弟に教授し
技藝に進み名聲益々揚り華族家にも召されて
厚く嘉賞を蒙りしが鯉三郎死後ふと重き病に
罹りて五六年間全く其業を廢せしため今日にては
藝妓連の門弟は減少せしが其技に於ては名古屋

舞臺

市中最も老練にしてまた最も純粹に西川鯉
三郎の骨脈を傳へたるものといふ評判高し尚名
古屋には別に嘉義女と同門たりし西川石松と
いふ舞踊の師ありて主として藝妓連の師範と
なりこれも評判は高けれど同女はいづれかといへば
斯道の政治家ともいふべく自ら舞ふよりも教授に
巧みなる方なり之に反して嘉義女の巧は幼少
より屢々舞臺に上りて演ぜしため最も自ら
舞ふことに巧みなり又石松派の藝風には花柳
藤間、西川、何くれとなく混入したれば今は

純然たる西川流とはいふべからずとなりて嘉義
 女の得意とする所は大概鯉三郎の允可物の中
 にあり此度慈善會にて演じる筈の木賊川の如きは
 東京にては甚だ珍らしき出し物なり又賤機しんきの如きも
 藤間花柳のとも手てが違ちがひ殊いに例れいの船頭ふなづかの出など
 には鯉三郎が苦心の跡見えて頗る面白きもの、由
 船頭と勤むる西川嘉幸は目下嘉義女の代理と
 して大阪へ出張中なるか之も特に呼度し引連れ
 東上し二番とも本衣裳にて演ずるとの事なり
 地方は吉住小三郎杵屋六四郎の連中なりとい
 ば定めて見物聽物なるべし

早稲田大學 圖書館寄附 音樂會演奏曲目

明治四十一年五月二十四日午後一時
東京音樂學校樂堂に於て開會

第一部

- 一、絃樂四部合奏
 - ニ短調
 - シ ユー ベルト 作曲
 - 安カグスト、ユンケル 女史氏
ハイルマ、ハイドリツヒ 氏
- 二、獨唱
 - メシヤ
 - シヤーロツテ、フレツク 嬢
 - ヘン テル 作曲
 - ヘルマン、ハイドリツヒ 氏
- 三、ピアノ獨奏
 - (甲) ヲルム
 - シ ユー マン 作曲
 - (乙) マツルカ
 - ゴ ダー ル 作曲
 - ハインリツヒ、ウエルクマイステル 氏
- 四、ヴァイオリンソロ獨奏
 - (甲) アダジオ
 - バルギール 作曲
 - (乙) ステアツオ
 - ゲ ー ス 作曲
 - シヤーロツテ、フレツク 嬢
- 五、獨唱
 - (甲) シテイル、グイ、テイ、ナハト
 - ホ ー ム 作曲
 - (乙) ウインタールード
 - コ ス ム 作曲
 - シヤーロツテ、フレツク 嬢
- 六、ピアノ四部合奏
 - ヘルマン、ハイドリツヒ 氏
安カグスト、ユンケル 女史氏
ハイルマ、ハイドリツヒ 氏
 - シ ユー マン 作曲

第二部

七、長唄

坪内博士作
鉢かつき姫

三唄
太大小笛同三同唄
鼓鼓鼓 弦

同同望住同杵同同吉
月田屋住
仙長太又彦六小小小
右左四之四四三三
門那吉那助那那藏那

八、舞踊

木賊刈 (本衣裳にて)

三唄
弦

西川嘉儀
杵屋六四那

九、狂言

名取川

高島綱五郎、小早川精太郎

十、歌澤

(甲) 黄色露湧衣
(乙) 淀

三唄 同三唄
弦 弦

同哥哥
柴澤 芝芝
錦美
子代好

十一、舞踊

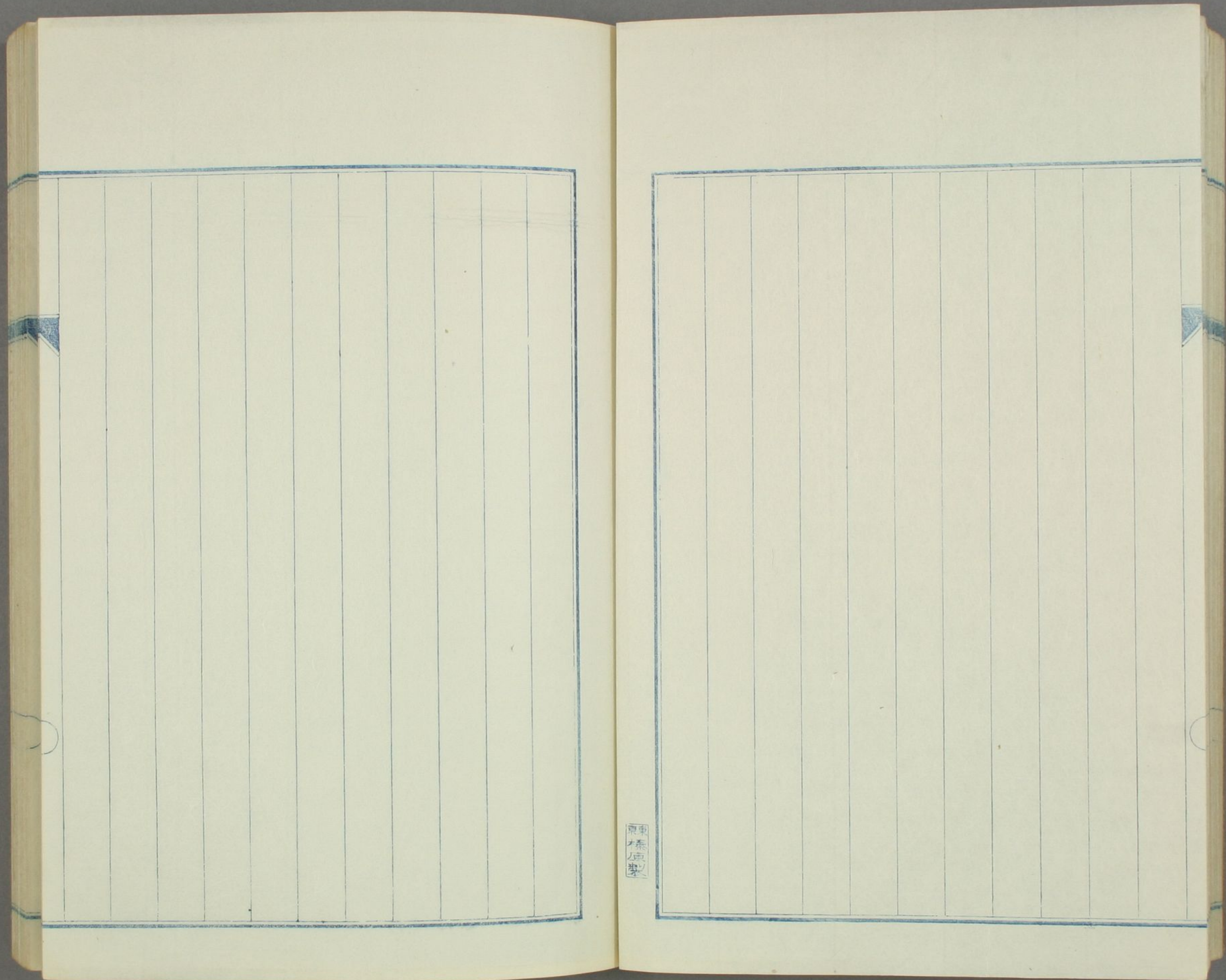
(本衣裳にて)

賤機帯

三唄
弦

吉住小三那
杵屋六四那
外長唄囃子連中前同斷

以上



東
泰
風
製

○五月廿六日早稲作の道邊を歩いた道邊
心身一休の道邊を歩いた道邊
と一涌あり、余がまき終つたのめと林の道邊
道邊の道邊の作と見えし、自ら歩くと
きよはるんは此心印の道邊を歩くと見えし
一り、鉢うのきと苦んさんさんさん
苦もろく出来たり、苦んさんと歩くと見えし
道邊の道邊と見え、大体の道邊を一休と見
た見えしと見え、道邊の道邊を歩くと見え
時、一休の道邊を歩くと見えし、道を歩
し、白隠の道邊を歩くと見えし、道を歩

お市は物も一物と聞かば一物
二七印しやおきもあつた
しるはし

↑ 梅宗をいつくろふと一物
杉葉をまつと六つ一物

女道之魔画淡 福原祇せ
九年何若果十年花を

城鑑より何所地つう大又何處の邦
一休の歌

東林原

きしししおそろし
地獄の家

地獄の家

いさくもいさくもいさくも

一休の歌

いさくもいさくもいさくも
心まじりつる心まじり

白濁の心おぼやかし
佛陀秘録七さく

まじりつる心まじり 佛陀秘録七さく
佛陀秘録七さく

来ひ 法を承りりや法傳を多く佛
家菩提も甚やの甚より、生るに涅槃
七元あるの法 三三
元印徳本紀之義自ら之義を寫し例
をるに第一と抄せしむる

一休
心とてあることいふか
畢得ることいふか
抄今之音

二
抄今之音の月代元の抄記



法...の...の...

法智不動の如く

水上打明雲子、捺着印轉

案 不滞清不抽泥を三子

婆子媽室

昔有一婆子供養一屠之...

正徳磨の如く

養枯木依其屋三冬を後氣

一休
志婆心为賊已梯、法淨沙門与女
妻、之相美、衣約我、枯楊春を
更生梯、

のるに

佛もさういひていふさういふの

に佛をもえさういふていふ

口
さういふはさういふとぬんぬん
さういふさういふ山登の修行

東林堂

の本末の両日坊うまの

一目見たりうまのこころん

起行論

方程の衆生のためさういふ佛一念の
懈怠の衆生のためさういふ過取三祇
さういふ

祇ま 三河傍慈の略

さういふ三河傍慈の略

障のまゝに胎服しなうとも屏の上の
考案を以て流しをん利を地地の操り
打破せざるは意匠を行く一の
少くとも六指と杖権の二を之を
中央に於て招おせざる一の
運籌回々希るも中央
府をこれと欲りて其の力を
がツマリ人物を地方より中央
をせしむる一の
伯回中央の力を大くせんと欲すは中央
の人才を改集せざる一の
中央の人材を

中央の集まるんと欲せば優待を以て
優待を以て其の力を大くせんと欲すは中央
府をこれと欲りて其の力を
がツマリ人物を地方より中央
をせしむる一の
伯回中央の力を大くせんと欲すは中央
の人才を改集せざる一の
中央の人材を
集めるる人才を以て其の力を大くせんと欲すは中央
府をこれと欲りて其の力を
がツマリ人物を地方より中央
をせしむる一の
伯回中央の力を大くせんと欲すは中央
の人才を改集せざる一の
中央の人材を

まはれ申を以て未だ其の以上こそ扱の
没後うけしきとてき道徳とてとてし
正業なき之をいふし言ふ汗顔もたせ
其れ下田の号扱とて古きとて治りし
何れも治後生とて中と不審御元とて
圓とて今とて教育事昔より元とて
のまじりしとて終る亦とてとて
仰とて女とて申とて西太后とて聴けり
とてとて年とて治りしとて天子とて
とて木とて白とて治りしとて此等とて
とてとて法政治とて一日とてとて

東洋
史記

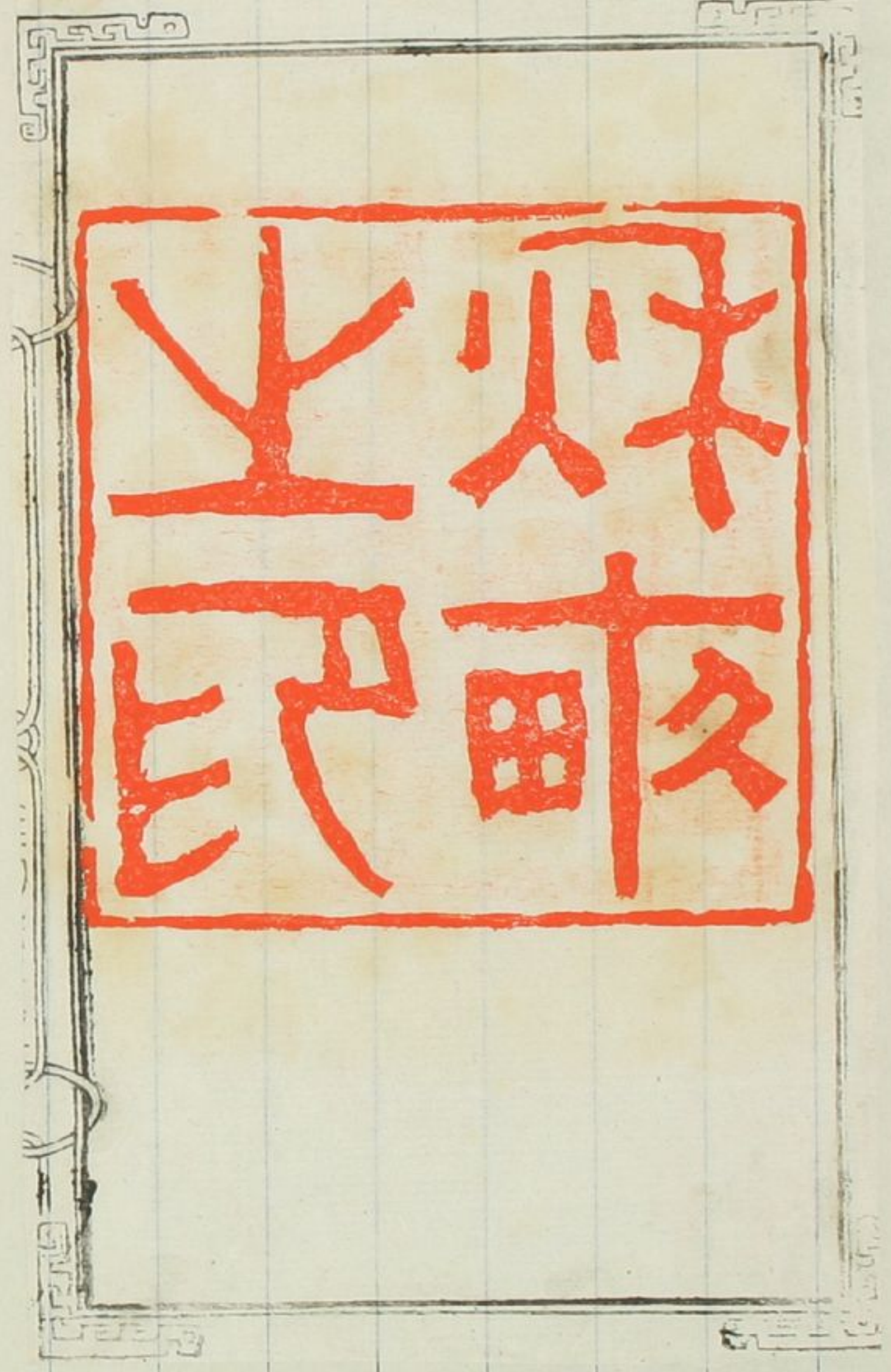
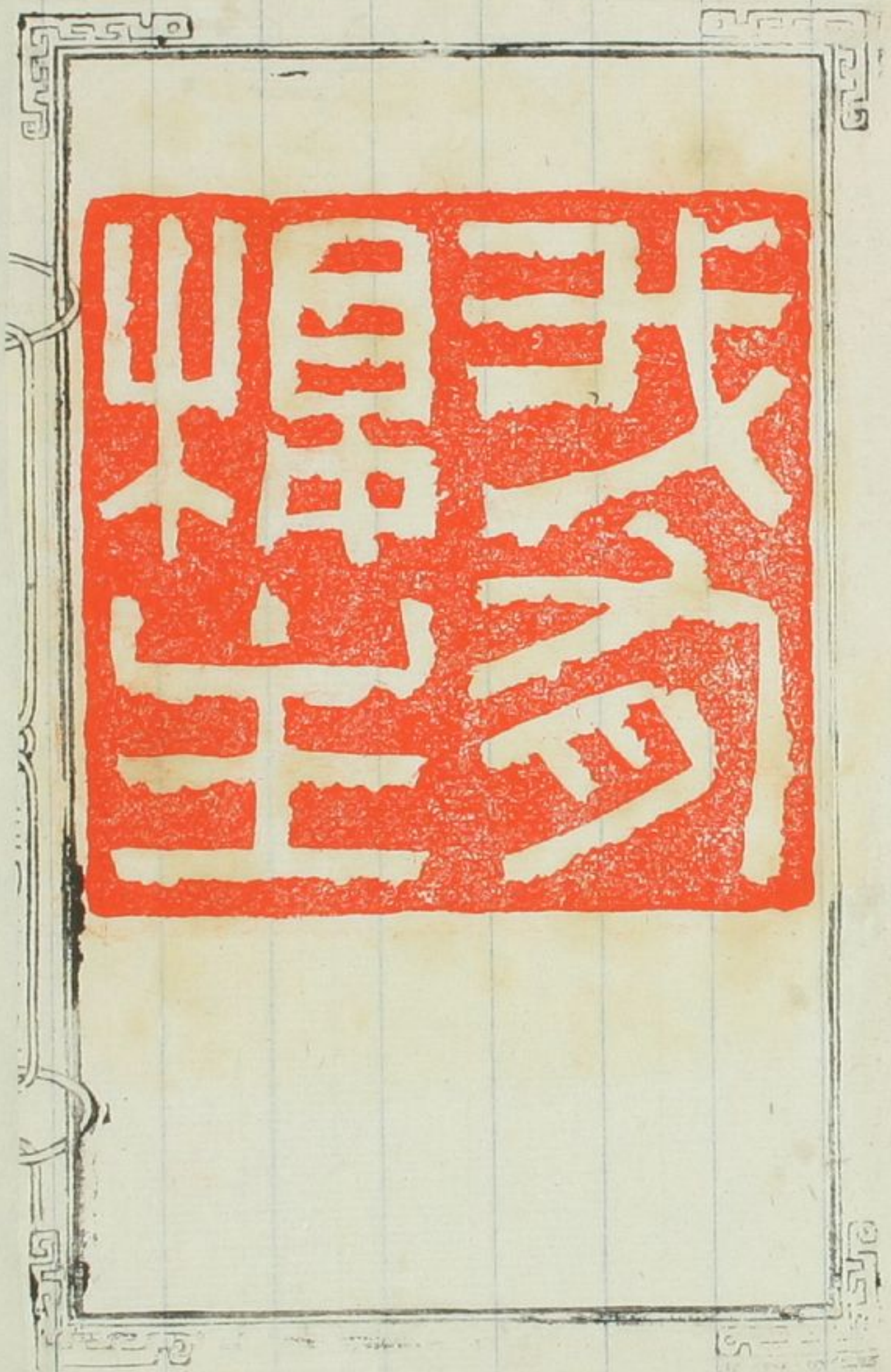
の忠告あり。西太后は母中、早く之を行
ふとて石とて大切とて忠告あり
伯の忠告も恐るは治事とて治りしとて
の忠告とてしとて昔も恨るは之を
の忠告とてしとて行ふとて大権とて
治事とて治りしとて治りしとて
犠牲とてしとて得る、即ち我邦維新
前はとて治りしとて士の変革の
大の治りしとて治りしとて治りし
治事とて治りしとて治りしとて
とて治りしとて治りしとて治りし
とて治りしとて治りしとて治りし

えとら村のめをとおし心りなるとお打書
花早のうとみぬらむと珍定しとまき
よのとやこゆ白儀と菊とちか
とまきうまをむ京御えと隔るも
つと一上の日被損傷はゆか
つとさうさうのちう菊のちか
よあせしよあええづ風炉の地といく
垢りくぬぬ、そんは其を粉とまき
よんたうさうさうははははははは
ちりし、お印のまきと
○比念早とくら座きり名也こんか能全

東林京堂

しりる金とをきあぬわな二つのは
風がうぬしとあをえりぬ優ふ也(四十一
年二月三日)

○湯の白くしと敷系し昔昔たの白
かこ印我と輝うらなう回を秋秋の造印
と得秋秋とちあの人を陸軍やめをい
とつうる人活者を能う、此印不夢刻
よあえと鈕と花款ありあ面印を
葉石(葉石)更ゆふと也えと辨い
んり、まき名家の力保ねとん
微きあふのさう(四十一)月



東林堂

一 柳屋の主人とて、（中略）早稲の
画とちとむ

一 床の崩れた地方より、（中略）大木の
押さるもの、（中略）揚りたる

一 柳屋主人の文法と語らる
扱おさる（中略）海の家

一 池邊静の、（中略）柳屋の
す

一 着の、（中略）柳屋の
付添ひの、（中略）

柳屋

一 柳屋の主人とて、（中略）

一 着の、（中略）柳屋の
柳屋の、（中略）

一 何れの、（中略）柳屋の
着た、（中略）

一 柳屋の、（中略）柳屋の
き、（中略）

一 柳屋の、（中略）柳屋の
す

一 柳屋の、（中略）柳屋の
外出中、（中略）

しあゝ

・ 友人の哀れ節の倣ふ

・ 土地の名をうらむるは
社寺の老を誇る

はるゝゝゝゝ

第三版

川上眉山の葬式

三百の文星一堂に會す

所謂夢幻的自殺を遂げたる川上眉山氏の葬儀は昨日午前十時より駒込吉祥寺に於いて営まれた。火葬に附したる遺骸を納めたる柩は本堂の正面位牌の前に据ゑられ周囲は數多の生花造花を以て充ち満ちた。親族席には未亡人鷺子を始め母堂及び令息晴彦國夫の二氏あり、また令弟輝雄氏令妹繁子其の他皆暗涙を吞つ、悄然として居並び、會葬者席には當代知名の士三百餘名着座す。總て導師山本宗國師侍僧を従へて上殿引導法語あり次いで親戚總代來馬琢道氏故人の傳記を朗讀し石橋思案氏は友人總代として沈痛悲哀なる調子を以て弔詞を朗讀した。また門下生總代山田旭雨氏鑿前に立つて弔詞を讀んだ。其の聲や悲みの爲めに震へ、其の手は感極つて戰いた。其終るや侍僧一同の讀經中に未亡人母堂一令息の焼香親戚

日 讀 賣 新 聞 (日曜木) 第一

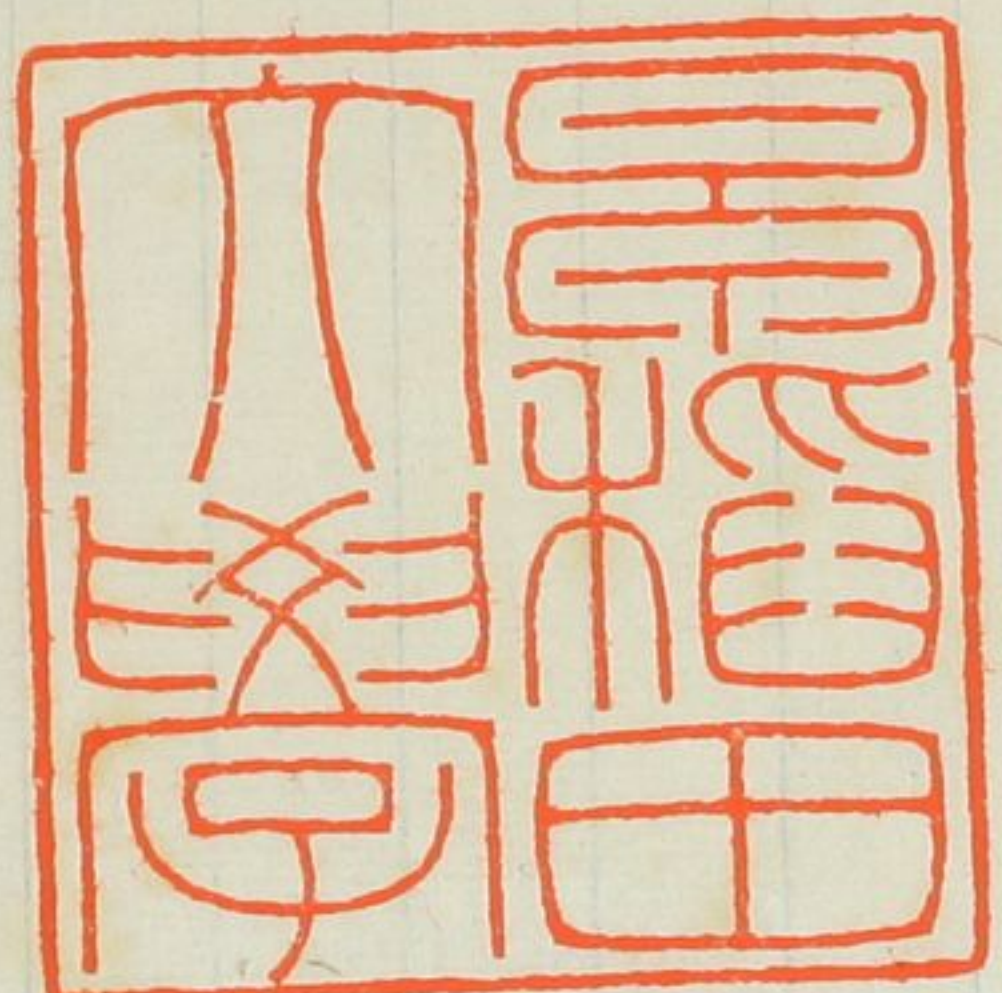
友人知己の焼香を終つた。思案氏の朗讀したる硯友社同人の弔詞は次の如くである。

弔詞

嗚呼夢幻又夢幻、夢幻に出で、夢幻に入る君の生涯はすべて現實の境を超越したりき、君が身を此世に置くの間は他皆云ふ作家即ち作中の人、常住、悉く詩的なり、今や魂幽冥に歸して文學史上の人となる世恐らくは云ふあらむ、君は遂に悲劇の主人公なり、縋に皮相を觀すれば或はさにもあらむか假に君の心裡を極めば君は樂觀の間にや死を急ぎけらし、さはれ君よ遺る者の嘆き悲しみは如何ばかりなるかを、蘇生りて想ふ能はざるか君には若き妻の有るあり、稚き子の有るあり、親しき友の有るあり而して尙他に大なる責任の有るありしを、他の認めたりこいふ自然にあきたらず君の捨てたりと云ふ技巧だに、猶且あこがるゝ生等は大自然を捕へ來つて大文章を成す者當に君なるべきを信じて疑はざり

東林堂

しに、さるを君はすべて捨てにき誰か惜み悲まさらんや
 而かも亦思はざる可からず文士誰か自らを殺さざる者ぞ筆の命毛より滴り落す心血は白紙を染めて常に紅に、嗚呼斯くして其人いつしか亡びざるを得ざるなり君此永かるべき犧牲の類はしきを避け渾身の血を一時に迸らして美神の前に捧げ茲に現實の境を超越したんぬ夢幻猶盡ぬ四十年夢幻の人は遂に夢幻の人なる哉嗚呼
 明治四十一年六月十七日 硯友社同人
 猶此日の會葬者の重なるものを上ぐれば宮川春汀、筒井年方、巖谷小波、江見水蔭、馬場孤蝶、田口柳汀、田山花袋、高須梅溪、徳田秋聲、渡邊龍水、渡邊黙禪、小山内薫、前田暁山、坪内逍遙、神谷鶴伴、坂井久良岐、塚原滋、柿、和田英作、飯田旗郎、半井桃水、野口米次郎、横井時雄、小杉天外、柳川春葉、西園寺百



相代、坪谷善四郎、内山正如、武内桂舟、米光、關月、後藤宙外、伊原青々園、長谷川天溪、岡村、村、紅、堀成之、安藤直方、芳賀矢一、水谷不倒、幸田露伴、梶田半古、鷗外夫人、島崎藤村、市島謙吉、高田早苗、岩野泡鳴、大町桂月等の諸氏三百名であつた。



○神仙本是多行行余此の
 後を多る頃あるも()
 一七刻をいふ体坊次
 州、似て故あるも()
 中の好とす
 へし

明治十一年七月
 初旬半
 一七刻
 七一

西新三郎

(七月二十三日)

中井数子に始つたとの見えを得た
此の主人は何れ朝川姓を名乗らぬと
せしむる人とも左の物語をすく
とをいふ

善庵を片山と山邊腹の子ひひ
山に毀して改め月うん生んは
山路に後片山の家も振はず
善庵の生んは此を言ふ困窮を
抱めれぬと山と宛交の友人
義侠の経商の身朝川眼得
然おと難すともふ此人も善を

東林堂

生んを困つたお物語ありと云ふ
の末三人がうめ善庵も三人の子供
と自分のさし引えり末三人も自分
の心算あともえんとの海老をと
えれぬと一人をいふ人さし
そのをてめを傳すともうつた
困窮すともいふ又難おつた
ことくとも善庵を此の経商の
善のん道に朝川の姓を名乗ると
みうつた尚何ともいふ人も善つて朝
川姓を名乗るとこともあるともいふ

とて片山此の後し片山朝川の家
の遺跡を建ててそととてす
此の跡におもふ人たさうく脱保
の人であらうとてく、詮定料を
見ると部各ある心う記すとも
ありと見えしとて東風のやしく
心こむとせえれとてふ(ま)説也
○大隈佐の國方津と書まん別
後成を先けし、十五と村氏を
持成とせしとてふ、自分とも
客とて扱つとせし、偶と久米
邦武

東海
傳

の思つたは、佐のあはれ地、此の二の
と油と久米の流、おはす地と種
矢の代、土肥佐年の領地、おはす
と甘の前中村、佐司とてふ、この
そのと東鏡、中村、佐司、夫役を
一國方の土工を記した、この
柔海を油とて記し、此の中村
土肥のともあふ、この中村、又
とてふ、中村とてふ、おはす、
上中村、下中村とてふ、佐の別
地、この前中村とてふ、おはす、

の鑑みんを世に命し其印を刻
下し命方のに仿ひ
く余の書とあらし



此杖筆も玉に近きよの支那
の杭涼 沅江と長河中の舟
のこの去年江都に舟
雲南の功朝の舟に高し



東洋
書院
藏

まう物も世 概原も世

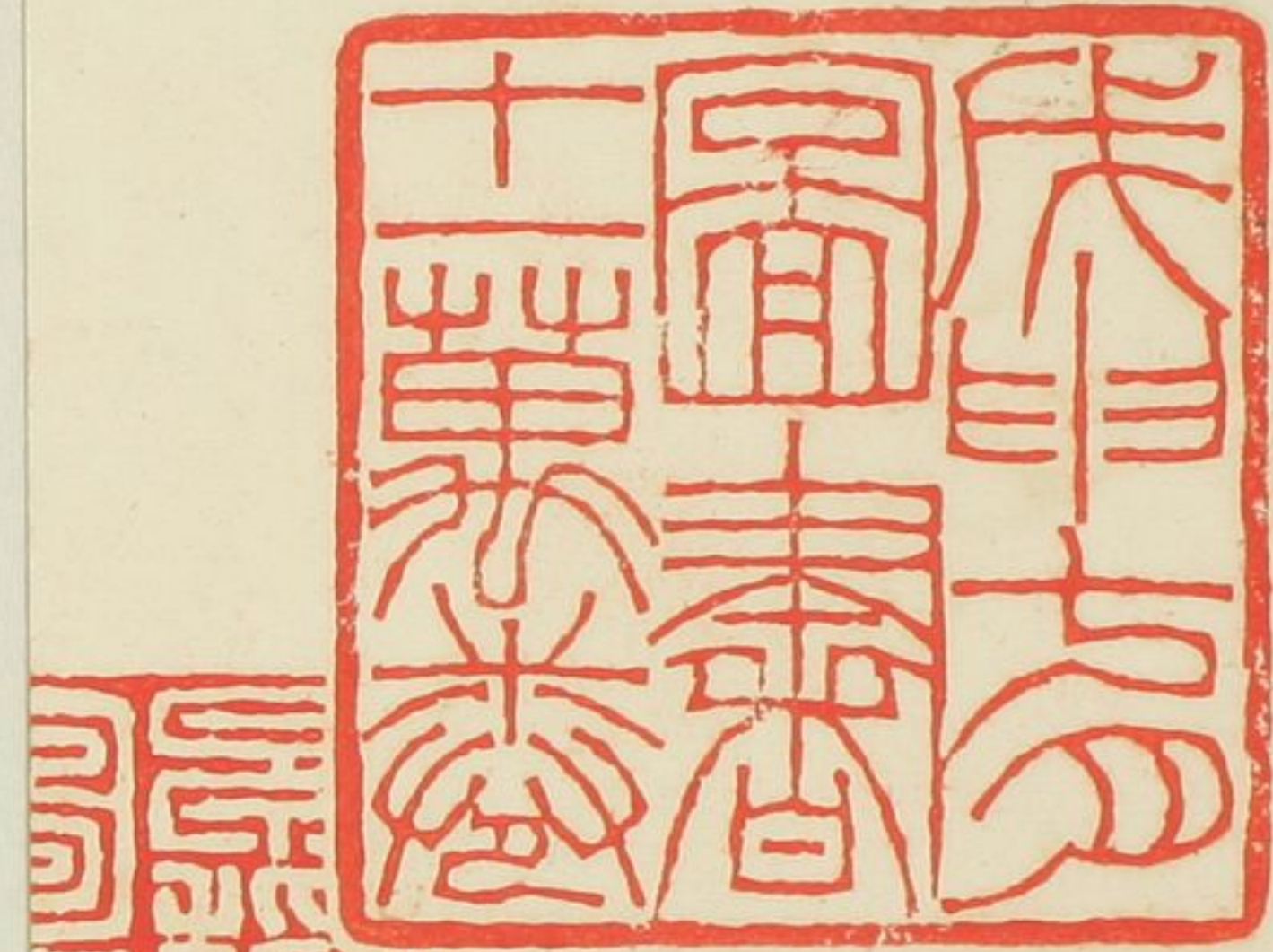
今世何世の

文ちの 半子苦心之んと刻る 回く玉を以
て琢琢、也、のき家ちの 彫る杖の
口く彫る力の様候：困難を感し
半子玉を雕るの力をもち 善し保三
原田山ちの、はくしよのたすく 印而を
とく、銅杖とこそ見ゆん 玉とこそ思
はる也 之の彫るしよ、石、磁、車
彫るしよ 断る此杖とあらし 断る
の何年一年七月十日 其杖記

○本年同方館の花書十一番 弟書

漢文

命轉經念印
此印本
其：我亡一
子直行は
切向は
政則仰上
于其親



命轉經念印
此印本
其：我亡一
子直行は
切向は
政則仰上
于其親

るえん計書... 九り...

東林居士

しきり之れを同人數十人：欲つこ
とて... 佛に... 此の... 此の...
る... 此の... 此の...
と... 此の... 此の...
(七月十三日...)



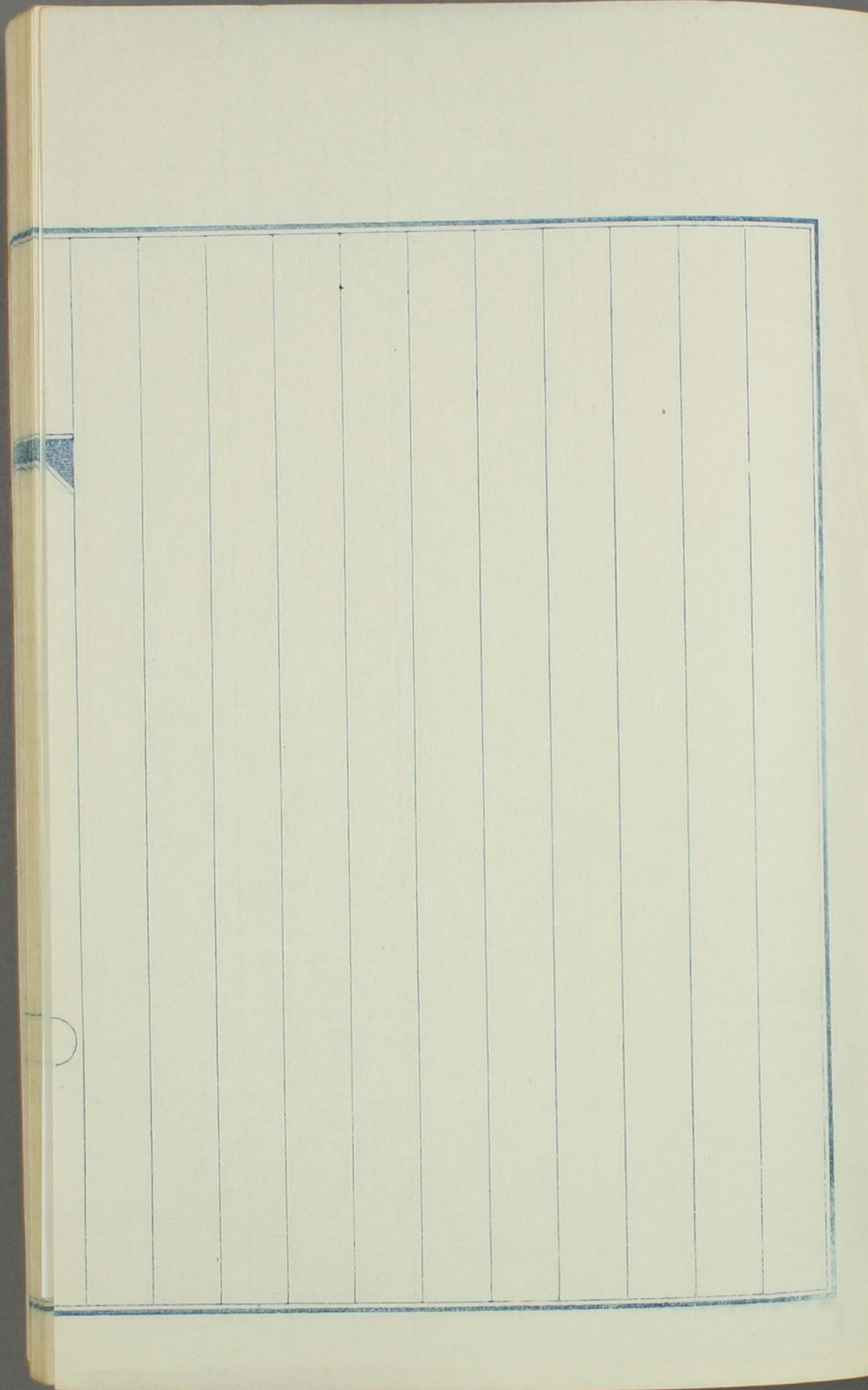
○本年圓方館の花巻十一番

Handwritten text on a postcard, including a circular postmark with the number '41' and a blue rectangular stamp.

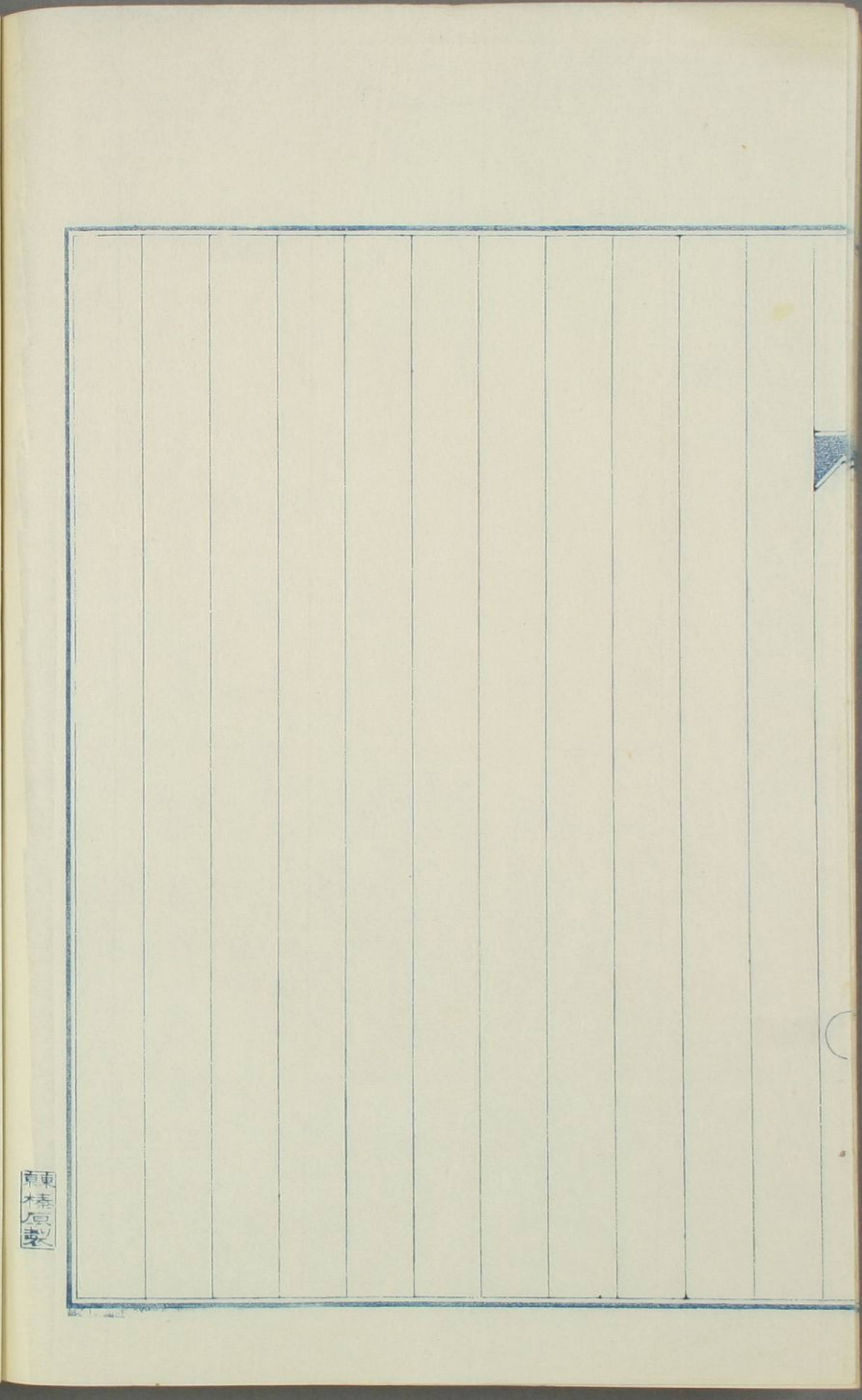
あるに計書... 九リ...

... 刷リ之ルを同人數十人... 傷に... 此の語者を... 七月十三日...





東
林
堂



以下
17丁
白紙

紅樓夢抄本續記

明治四十四年四月十日 起業